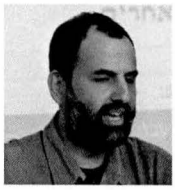
解説

細田 和江



本作の作者アルモグ・ベハル（Almog Behar 一九七八―）はイスラエルの都市ネタニヤ出身のユダヤ人詩人・作家である。ヘブライ大学で哲学を修めた後、二〇一五年にはテルアビブ大学で博士号（文学）を取得している。現在は詩人・作家であると同時にヴァン・リール研究所の研究員などアラブ文学の研究者としても活動、また、いくつかの大学で教鞭もとっている。

ベハルの育った家庭環境は、他のイスラエルのユダヤ人同様、さまざまな文化背景に彩られている。彼自身はイスラエル生まれであるが、父親はドイツ系とトルコ系の出自、母親はイラク系で、ともに子供のころにイスラエルへ移民している。父方の祖父は、イスタンブルから移民したトルコ系ユダヤ人とドイツ系ユダヤ人の子としてベルリンで生を受けた。その後、祖父はナチスの台頭から逃れ、デンマーク経由でイスラエルへ移民したが、肉親のなかにはホロコーストで命を落とした者もいた。父の家庭内ではアラビア語、ドイツ語、ラディーノ方言（トルコ系ユダヤ人が日常的に用いていたユダヤ・スペイン語）が用いられていたという。

本作でデビューしたベハルはもともと詩人として作家活動をはじめている。すでに、詩集三編『井戸の乾き』（Tsim'on be'erot: Am Oved, 二〇〇八年）、『舌から引く糸』（Huṭ moshekh min ha-lashon: Am Oved, 二〇〇九年）『囚人に捧げる詩』（Shirim la-'asiri batei ha-sohar.）を出版、二〇一〇年には初の長編『ラヘルとエゼキエル』（Ts'aḥlah ve-Ḥezḳel: Keter）を上梓した。詩でベルンシュタイン賞を、小説で首相賞を受賞するなどその作品の評価は高く、有望な若手作家としてその地位を築いている。さらに、アラブ文学の研究者としてマフムード・ダルウィーシュの詩に関する論考などもあり、活躍の場は多方面に渡っている。

著作以外にも、ベハルは、二〇一四年に『2』（Shetaym / Itḥnãn, Keter）というアラビア語とヘブライ語のバイリンガル短編集の編者としても注目されている。イスラエルにおいて、二言語が併記された書籍はこれまでもいくつか出版されてきた。一九八〇年代に出版されていた文芸雑誌『出会い』（Mifgash / Liq ā'u）がまさにそうである。『2』は、アラブ人作家はアラビア語で、ユダヤ人作家はヘブライ語で書いたものがそれぞれ翻訳・併記されている。作品は七十編を超えており、これほど多くの若手作家／詩人が関わったもので、かつ大手の出版社から書籍として出版された例はなかった。プロジェクト自体は二〇〇八年からはじまり、ユダヤ人のベハルとタマル・ヴァイス・ガバイ、アラブ系イスラエル人ターメル・マサールハの若手作家三人が中心となっている。

ベハルは在米キリスト教のメディアに「ヘブライ語で書く作家のグループとアラビア語で書く作家のグループは交わらずに人生を歩み、交わらずに本を出していて、ほとんど接点を持たない」と語り、現在のイスラエル社会の閉鎖性に警鐘を鳴らしている。この『2』にベハルは実験的な詩（同一の三言語の詩〈ヘブライ語〉〈アラビア語〉〈ヘブライ語とアラビア語の混在〉）を載せている。

その他にも彼は、アラブ人との交流を積極的に行っている。あるときは、イスラエル政府による土地没収が続く東エルサレムのシェイフ・ジャーラでの詩の朗読会に参加し物議をかもした。

アラブ人との活動や、アラビア語の世界を描く一方、ベハルは宗教的なユダヤ教の世界にも注目する。お見合いで結ばれた若いユダヤ人の夫婦が主人公の長編『ラヘルとエゼキエル』で

は、エルサレムにおける信仰に篤いミズラヒーム（中東諸国出身のユダヤ人）共同体を作品の舞台に据えたベハルは、自身の宗教観について、宗教派ではなく伝統派のユダヤ人、世俗派と宗教派の中間で、ユダヤ教の伝統的な文化を保持しているのだと規定している。そして、その伝統のなかに、豊穣なアラブ性が存在しているのだという。つまり、彼にとって「アラブ」と「ユダヤ」が混在することは何ら矛盾するものではない。

今回紹介する『我が輩もユダヤ人なり』は、ベハルが二〇〇八年に出版した同名の短編集に収録されている。この短編集は本作が二〇〇五年、イスラエルの日刊紙ハアレツの短編小説賞を受賞したことがきっかけで出版されたものであり、彼のデビュー作である。作品自体はヘブライ語の小説であるが、ヘブライ文字で表記されたアラビア語タイトルが付けられている。直訳すると「私はユダヤ人の一人である」となるが、拙訳のタイトルは文字と言語の異なる原文のイメージを意識したものにした。

短編集のなかでは本編のみヘブライ語に続いて同内容のアラビア語の翻訳が掲載されている。また、このアラビア語バージョンはエジプトの文芸誌ヒラールにも掲載されたという。

本作に登場するのは作者の分身のようなエルサレム在住の若いイラク系ユダヤ人である。その彼が突然アラビア語訛りでしか話ができなくなったためにおこる騒動と周囲の困惑が主人公の独白により語られる。

彼の祖父母の人生からこの物語の着想を得たのだとベハルは語る。彼の母方の祖母はイラクのバグダッド出身であったが、イスラエルに移民してからはなるべくヘブライ語で子供と会話するようにと周囲から言われていた。しかしそうした状況にうまく対応できなかったためか、娘がヘブライ語で答えてもアラビア語で返答していたという。最終的に祖母自身もヘブライ語を習得したものの、老いて痴ほうの症状が悪化するにつれヘブライ語を完全に忘れてしまい、亡くなるまでアラビア語でしか話さなくなったという。祖父もまた、バグダッド訛りのラディーノ方言で話していた。こうしたエピソードが少しかたちを変えて本作に描かれている。

自身のミズラヒー・アイデンティティについてベハルはこう述べる、「ユダヤでもありアラブでもある」にもかかわらず、そのアラブ性が看過されてきた、と。そこで彼はあえて顔半分が覆われるほどの髭を生やし、周囲の人に疎まれながらも自分のなかのアラブ性を過剰に表現する。

イスラエルの文学界は、建国後ヨーロッパ出身のユダヤ人が中心となって発展し、非ヨーロッパ系の出自を持った作家が登場したのは一九七〇年代に入ってからであった。以降、イラク出身のユダヤ人作家らによって、アラブ世界の伝統的なユダヤ人社会が色鮮やかに描かれはじめる。そして現在、彼ら非ヨーロッパ系ユダヤ人の子供たち、自身には移民の経験がない作家がユダヤ教徒の伝統に根付いているアラブ性、もしくは東洋的な要素を作品で表すようになっている。イスラエル文学界の重鎮で、父方はスペイン系、母方はモロッコ系ユダヤ人のA・B・イェホシュアが、『マニ氏』（Mar Mani: Ha-kibuts ha-me'ukhad 一九九〇年）で自身の家族のルーツであるサロニカ（テッサロニキ）から移民したユダヤ人の歴史を、エジプト系の出自を持つオルリー・カステルブルームはその名も『エジプト小説』（Ha-roman ha-Mitsri: Ha-kibuts ha-me'ukhad 二〇一五年）という長編でモーゼの時代から現代までのエジプト系ユダヤ人一家カスティル家の放浪の歴史を、それぞれ自伝的要素を交えて描いている。

しかし、ベハルほど自身のアラブ性を強調し、作品のなかに多言語的な要素を取り入れたイスラエル生まれのユダヤ人作家はまれである。カフカやボルヘスの影響を受け、消えゆく言語と消えゆく文化、失われていく前の世代の記憶を、亡霊のごとく現代の物語に描き出す、これがベハル風の伝統の継承なのであろう。